特集３
海外スタディツアー

1. これまでの海外スタディツアー一覧

訪問国/日程	内容
【カンボジア王国】 2013年 9月3日～9月9日	【目的】 カンボジアで活躍する社会起業家の現場を訪問し、最前線を学ぶ。 【主な訪問先】 ・カンボジア赤十字社（CRC） ・難民を助ける会（AAR）：障がいのある子どもたちや、社会に参加できない人たちのために無償で車椅子を提供 ・アンコールクッキー：現地でツアーガイド・日本語講師を務める小島幸子氏が設立した土産菓子会社。若者の自立を促すことが理念 ・クルクメール：一方的な支援ではなく地域に根差した「収入＝仕事」を創ることを目指し、現地スタッフとオーガニックハーブを使ったホームスパ製品を開発・販売。篠田ちひろ氏が設立 ・スバエク工房：自らも孤児院出身のチアン・ソパーン氏が身寄りのない子どもを引き取り、カンボジアの伝統芸能であるスバエクを教えながら制作 【参加者】学生11名、引率1名（原田ボランティアセンター長）
【トルコ共和国】 2014年 2月19日～2月27日	※明治学院大学「トルコ親善ボランティアミッション」（国際センターと共催） 【目的】 ①親日国トルコでのボランティア活動、大学生と触れ合うことを通して相互交流、親善を図る。②トルコの歴史、文化、社会を理解することで、将来の大学間同士の交流、ボランティア活動の促進を目指す。 【主な訪問先】 ・キムセヨクム（東日本大震災にも駆け付けてくれたNGO）：ボランティア活動（難民、子供支援）に参加 ・イスタンブール工科大学、スレイマン・シャフ大学：交流 ・エフェス遺跡（聖母マリアの家で有名）：キリスト教教育 【参加者】学生14名、引率2名（吉井副学長、原田ボランティアセンター長）
【バングラデシュ人民共和国】 2014年 9月2日～9月8日	【目的】 ①貧困に対する理解を深める（同国は「アジア最貧国」と呼ばれる）。②現地で活躍する社会起業家・NGOの方たちがどのように異文化の中で活動しているかを学ぶ。③現地の大学生および子どもたちと交流。 【主な訪問先】 ・グラミン銀行：マイクロクレジットという少額融資を専門にする銀行。2006年に創設者ユヌス氏とともにノーベル平和賞を受賞

【バングラデシュ人民共和国】（続き）	・JAAGO：貧しくて学校に通えない子どものための教育支援施設（教育費はドナー制度を運用） ・ダッカ大学：国内随一のエリート大学。入学のためには通塾が必要のため、学生の多くは富裕層のさらに一部の上層部という現実がある ・バングラデシュ赤新月社：一週間前に洪水による救護活動に取り組んだ大学生の話を聞く ・BRAC：下痢の脱水症状を防ぐ経口補水療法を国内に普及させた世界最大のNGO。小規模資金融資と金銭教育もおこなう 【参加者】学生 10 名、引率 1 名（中原コーディネーター）
【スリランカ民主社会主義共和国】 2015 年 9 月 4 日～9 月 12 日	【目的】 ①スリランカでの貧困や搾取、教育などの問題を通して、日本にも存在する「貧困」との共通点や相違点を考察する。②フェアトレードがもたらす貧困問題などへの理解を進める。③2009 年まで紛争地域であったスリランカの現在のようすを知ることで、人権や多文化共生などへの理解を深める。 【主な訪問先】 ・PARCIC：日本の NGO 団体。小規模紅茶農家の有機転換によりフェアトレードを促進 ・サルボダヤ：世界から戦争、疫病や飢饉などを撲滅させるためのアジア最大のNGO ・スリランカ赤十字社 ・象の孤児園：迷子になったり密猟によって親をなくしたりした子象などの保護施設 【参加者】学生 18 名、引率 1 名（中原コーディネーター）
【タイ王国】 2016 年 9 月 3 日～9 月 13 日	【目的】 ①国連の定める「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち「ジェンダー平等の実現」「持続可能な都市/地域の実現」への課題とその解決への取り組みを学ぶ。②協定校であるタマサート大学の学生とボランティア活動を通じて交流を深める。 【主な訪問先】 ・ドイ・パ・ソン寺院（Doi Pha Som Temple）：故プミポン国王が提唱した「足るを知る経済」哲学に基づいた自給自足のコミュニティを形成 ・The Foundation of Child Understanding（FOCUS）：人身売買の被害者である女性や子どもを保護、被害拡大防止などの活動 ・ドンチャン寺（Don-Jan Temple）：山岳民族出身の孤児を保護する孤児院 ・タマサート大学：地域の小学校でボランティア活動 【参加者】 学生 19 名、引率 2 名（中原コーディネーター、北野ボランティアセンター職員）

2. 2016年度海外スタディツアー（タイ王国）

目　的	①国連の定める「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち「ジェンダー平等の実現」「持続可能な都市/地域の実現」への課題とその解決への取り組みを学ぶ。 ②協定校であるタマサート大学の学生とボランティア活動を通じて交流を深める。
日程、場所	2016年9月3日（土）～9月13日（火） タイ王国：チェンマイ、チェンライ、バンコク、ランシット
参加人数	学生19名、引率2名（中原コーディネーター、北野ボランティアセンター職員）

●事前学習

①

目　的	タイの人身取引問題を学ぶ
日時、場所	2016年6月28日（火）、7月1日（金）、両キャンパスをインターネットで繋いで実施
講　師	国際学部　齋藤百合子准教授（ボランティアセンター運営委員）

②

目　的	タイの住民運動や社会などについて学ぶ
日時、場所	2016年7月5日（火）、7月12日（火）、両キャンパスをインターネットで繋いで実施
講　師	国際学部　重冨真一教授

③

目　的	学習発表会（参加学生および海外プログラム事業部メンバーによる、タイの仏教や歴史、文化などに関する発表会）
日時、場所	2016年7月13日（水）、横浜キャンパス　1022教室

④

目　的	タイ語、タイの文化を学ぶ
日時、場所	2016年8月3日（水）、白金キャンパス　1252教室
講　師	教養教育センター　宇戸清治非常勤講師

⑤

目　的	出発直前学習会（参加学生および海外プログラム事業部メンバーによる、7月13日の発表会内容のフォローアップ、訪問団体に関する発表会）
日時、場所	2016年9月1日（木）、横浜キャンパス　1032教室

●ツアー行程

日程	場所	活動内容
9/3（土）		夜、羽田空港集合
9/4（日）	バンコク経由	午前、チェンマイ空港着 チェンマイ市内歴史的寺院等、Sunday market
9/5（月）	チェンマイ	・OTOP（One Tambon One Product）：農村部の地域活性化を目的に作られた組織

9/5（月）（続き）		・ドイ・パ・ソン寺院（Doi Pha Som Temple）：郊外山間部にある寺院とコミュニティ。自給自足の生活をしており、水の供給も自分たちでおこなっている
9/6（火）	チェンマイ	・The Foundation of Child Understanding（FOCUS）：人身取引問題について特化した組織 ・Chiang Mai Shelter for Children and Family：政府と直接連携した虐待などを受けた子どもたちを保護する施設 ・タイ古典舞踊を見学しながらの夕食
9/7（水）	チェンマイ→チェンライ	・ドンチャン寺（Don-Jan Temple）：山岳民族出身の孤児を保護する孤児院 ・ワット・ローン・クン（Wat Rong Khun）
9/8（木）	チェンライ→バンコク	・ミラー財団（The Mirror Foundation）：山岳民族の問題を多面的にとらえて活動する組織。活動するために必要な資金も自分たちで調達しようと努力している
9/9（金）	バンコク	・プラティープ財団（The Duang Prateep Foundation）：バンコクのスラム街住民を保護する組織 ・キャベジズ＆コンドームズ（Cabbages & Condoms）：レストランにて昼食（コンドームを使っての避妊やHIV/AIDS 感染予防の啓発活動をおこなっているレストラン） ・シーナカリンウィロート大学：最近ボランティアセンターが学内に設置された。ボランティア活動をおこなった学生２名より活動報告の後、２グループに分かれ、意見交換および振り返りをおこなう ・ナイトマーケット、アジアティーク
9/10（土）	バンコク	・メークロン市場、アンパワー水上マーケット：タイ王室ロイヤルプロジェクト視察や地域活性化プロジェクトのＴシャツ作り体験 ・タマサート大学タプラチャンキャンパスにて歓迎会出席
9/11（日）	バンコク→ランシット	・タマサート大学ランシットキャンパスにて、学生交流、ボランティアセンタースタッフからの講義、ディスカッション、ワークショップをおこなう
9/12（月）	バンコクから羽田空港へ	・タマサート大学生と地域の小学校（Jarusorn Bamrung School）でのボランティア（フィールドワーク）。日本とタイの文化・遊び・料理などを生徒たちに体験させる ・タマサート大学へ戻り、地域課題解決のためのプロジェクト立案、ワークショップ等
9/13（火）		早朝、羽田空港着、解散

●白金祭での活動

目　的	タイ風焼きそば「パッタイ」販売 （「Do for Smile@東日本」プロジェクト　陸前高田チームと一緒に）
日時、場所	2016年11月1日（火）～11月3日（木･祝）、白金キャンパス

●報告会＆事後学習会

目　的	学生たちが選んだトピックについてクイズなどを通して参加者にも考えてもらう。 持続可能な地域開発・ジェンダーフリー・インフラ・大学と四つに分けて説明
日時、場所	2016年11月17日（木）、横浜キャンパス　640教室

●タイを伝える写真展

目　的	タイの今を伝えるため、学生が撮影した写真をパネルにして展示。自分たちが得た学びを広く伝える
日時、場所	2016年11月7日（月）～11月25日（金） 横浜キャンパス（図書館2階、クラララウンジ）

●振り返り会

目　的	帰国後各自が執筆した報告書について、他の学生が作成した部分を読んで感想を述べながら評価する
日時、場所	2016年12月1日（木）、両キャンパスをインターネットで繋いで実施

●学生たちの報告より（抜粋）

・ミラー財団での外国人ボランティアスタッフによる、ある意味「よそ者」としての関わり方は、コミュニティを支えつつ、活動していくなかで非常に重要であると同時に、部外者にしかできない関わり方であろう。「よそ者」でありながらも、その地域の中に溶け込みながら活動し続け、その地域に根を張ることも重要である、と感じた。

・一番現実を突きつけられた気がしたのは、綺麗な駅の階段の下で、昼間にダンボールを敷いて、小学生ぐらいの女の子と妊婦さんと思われる女性が寝ていたことである。一部の人々がお金持ちで、大学に通えて、綺麗な家に住んでいる一方、国内にかなりの貧困格差が存在すること、また都市部のバンコクでさえも、貧富の差が存在するということを改めて実感させられた。

・プラティープ財団ではスラムができた背景やスラムの人々への教育の重要性を聞くことができた。教育は生きる選択肢を広げる最も大切なものであると再確認できた。“知ろう”とすることで視野が広がるということを感じた。

・「ボランティアには“Feeling”“Thinking”“Learning”が必要である」というタマサート大学ボランティアセンターのタマポン先生の言葉は、さまざまなことを考えるきっかけになった。難しく考えるのではなく、お互いを理解し、一緒に歩んでいくことがボランティアをするうえで大切であると再認識した。

・日本のGDPの値はよくなったものの、そこからこぼれ落ちていく問題もある。現代社会の問題について、今回学んだことを生かして考えていければと思う。

・「足るを知る経済」の哲学とローカリゼーションの学びを通して、日々できる小さな国際貢献（ファストファッションをしない、水筒を持参すること、地元で作られた食べ物を食べるなど）を大切だと感じるようになった。また、「食」にも興味を持ち始め、春学期に農業インターンをすることにした。